

六甲山系、摩耶地区における秋期の鳥類状況について

宮 本 忠 之

〔はじめに〕 神戸市民の“ふるさと”ともいえる摩耶山は、古くから切利天上寺があり、その附近は国有林ということと相まって、自然環境が現在でも昔とほとんど変わらず、将来もあまり変らないだろうことが期待される。神戸市近郊ではこのような場所は近年急激に減ってしまい、その意味では摩耶山は生物調査するには、恰好なしかも稀少価値のある場所ということが出来る。

六甲山系は南に淡路島をひかえ、春秋の鳥類の渡りのメインコースとも考えられるので、私は1964年から摩耶山上に定点を設定し、そこで長期的、かつ継続的に鳥類の観察を行なうことにより、当地域の鳥類状況がある程度つかむことが出来た。今回は特に秋期における鳥類状況を報告したい。

〔当地域の植生及び気象状況〕

上層木 スギ、ヒノキ、アカマツなど。
中層木 ナワシログミ、ハルグミ、ソヨゴ、アラガシ

など。

下 草 ネザサなど

平年気温 15.5℃ (1941~1970)

平年降水量 1,366.9mm (1941~1970)

最高気温 36.2℃ (1972)

最低気温 -1.3℃ (1972)

降雪日数 15日 (1972)

積雪量 0cm (1972)

(神戸海洋気象台調べ。直線距離約8km)

〔調査方法、調査結果及びその分析、考察など〕

摩耶山頂(標高698m)附近に定点を設け、そこから半径5mの半球を地上に仮想し、夕方の30分間、その中で確認された鳥類の種と個体数とをチェックする。このような調査を8月27日から11月25日まで、1964年から1972年までの9年間に亘って行なった。この間に確認された鳥類とその1か月区切りの個体数を第1表に示す。

第1表 記録鳥類の種類とその個体数

番号	鳥 類 名	種類	個 体 数 (1964 ~ 1972 の 合 計)			
			8/27~9/25	9/26~10/25	10/26~11/25	合 計 (8/27~11/25)
1	ツ ミ	旅鳥			1	1
2	コノハズク	旅鳥		1		1
3	オオコノハズク	旅鳥		1	4	5
4	アカショウビン	旅鳥	2			2
5	アオゲラ	留鳥	2			2
6	アカゲラ	留鳥		1		1
7	コゲラ	留鳥	28	14	7	49
8	キセキレイ	留鳥	2			2
9	ビンズイ	冬鳥		2	1	3
10	サンショウクイ	夏鳥	6			6
11	ヒヨドリ	留鳥	16	16	3	35
12	チゴモズ	旅鳥	1			1
13	モズ	留鳥	4	14	4	22
14	ミソサザイ	冬鳥			4	4
15	カヤクグリ	冬鳥			12	12
16	コマドリ	旅鳥		3	3	6
17	ノゴマ	旅鳥		2		2
18	コルリ	旅鳥	28			28
19	ルリビタキ	冬鳥		2	111	113
20	ジョウビタキ	冬鳥			3	3
21	マミジロ	旅鳥	1	6		7
22	アカハラ	旅鳥			1	1

番号	鳥 類 名	種類	個 体 数 (1964 ~ 1972 の 合 計)			
			8/27~9/25	9/26~10/25	10/26~11/25	合 計 (8/27~11/25)
23	シロハラ	冬鳥		12	31	43
24	マミチャジナイ	旅鳥	1	12	2	15
25	ヤブサメ	夏鳥	52	27	3	82
26	ウグイス	留鳥	8	52	72	132
27	メボソムシクイ	旅鳥	32	92	14	138
28	エゾムシクイ	旅鳥	35			35
29	センダイムシクイ	夏鳥	33			33
30	キクイタダキ	冬鳥			12	12
31	キビタキ	旅鳥	21	49	3	73
32	ムギマキ	旅鳥			2	2
33	オオルリ	夏鳥	64	36		100
34	サメビタキ	旅鳥	1	4		5
35	エゾビタキ	旅鳥	3	1		4
36	コサメビタキ	夏鳥	11			11
37	サンコウチョウ	旅鳥	3			3
38	ヒガラ	冬鳥			4	4
39	ヤマガラ	留鳥	5	7	1	13
40	シジュウカラ	留鳥	62	57	63	182
41	エナガ	留鳥	8	8	8	24
42	キバシリ	冬鳥			1	1
43	メジロ	留鳥	4	19	92	115
44	ホオジロ	留鳥	34	35	20	89
45	ミヤマホオジロ	冬鳥			5	5
46	アオジ	冬鳥	1		25	26
47	クロジ	冬鳥			2	2
48	アトリ	冬鳥		1	2	3
49	カワラヒワ	留鳥	7	2	1	10
50	マヒワ	冬鳥		4	12	16
51	ベニマシコ	冬鳥			3	3
52	ウソ	冬鳥			8	8
53	スズメ	留鳥	1	3	2	6
54	カケス	留鳥	1		2	3

以上のように当期間中の当時間内、当体積中に確認された鳥類は54種、1,504羽であった。

つぎにそれら鳥類中、当期間内に限定した場合の占有度の高いもの（鳥類の占有度は調査回数中の毎回確認さ

れるものを最優占種、すなわち占有度の最も高い鳥類とする場合と、確認鳥類の延べ個体数の最も多い種を最優占種とする場合があるが、本レポート中では後者をとっている。）を第2表に示す。

第2表 調査期間中当地域における占有度の高い鳥類

順位	留鳥中の順位	冬鳥中の順位	夏鳥(含旅鳥)の順位	鳥 類 名	個体数	確認全個体数中の占有率(%)
1	1			シジュウカラ	182	12.1%
2			1	メボソムシクイ	138	9.2%
3	2			ウグイス	132	8.8%
4	3			メジロ	115	7.7%
5		1		ルリビタキ	113	7.5%
6			2	オオルリ	100	6.7%
7	4			ホオジロ	89	6.0%

順位	留鳥中の順位	冬鳥中の順位	夏鳥(含旅鳥)の順位	鳥 類 名	個体数	確認全個体数中の占有率(%)
8			3	ヤブサメ	82	5.4%
9			4	キビタキ	73	4.9%
10	5			コゲラ	49	3.2%
11		2		シロハラ	43	2.9%
12	6			ヒヨドリ	35	2.3%
13			5	エゾムシクイ	35	2.3%
14			6	センダイムシクイ	33	2.1%
15			7	コルリ	28	1.9%
16		3		アオジ	26	1.7%
17	7			エナガ	24	1.6%

上表にオオルリ、ヤブサメ、キビタキなどが入っていることは、当地域がかなり深山性の様相を呈していることを物語るものと考えられる。

さらに9年間を通じて、各月・各旬さらには各旬の中での前半と後半とかなり細かく区切った場合の占有度の高い鳥類の変遷を調べて見ると、つぎの通りであった。

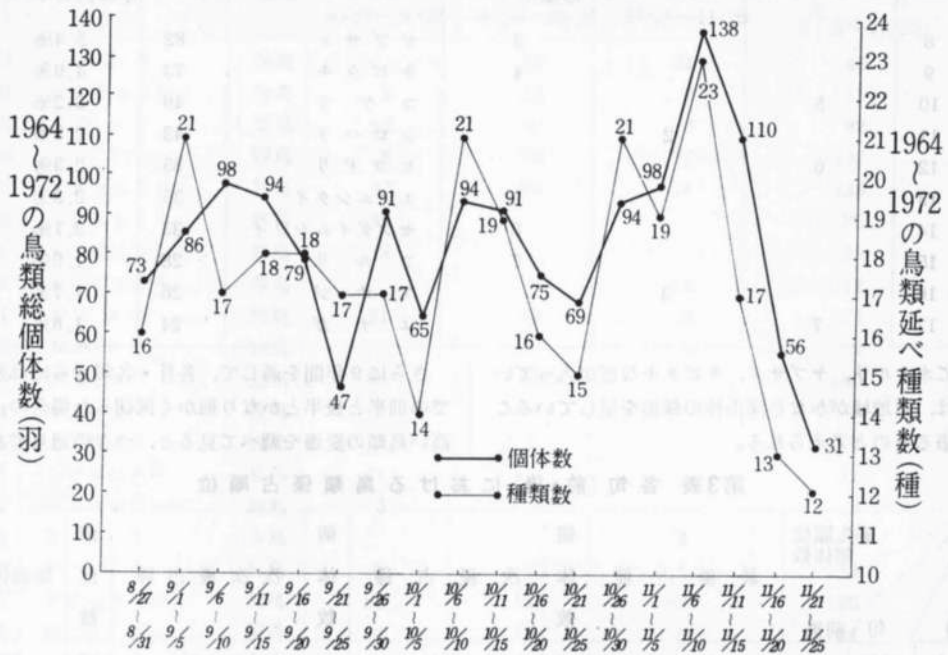
第3表 各旬(前・後)における鳥類優占順位

月	旬	優先順位 前後	優先順位 個体数	最優占種	個体数	次優占種	個体数	次次優占種	個体数	総個体数
				8月	下旬	後	センダイムシクイ	14	シジュウカラ	14
9月	上旬	前	センダイムシクイ	11	メボソムシクイ	10	エゾムシクイ	9	86	
		後	オオルリ	14	ヤブサメ	14	エゾムシクイ	13	98	
	中旬	前	シジュウカラ	21	オオルリ	13	ホオジロ	12	94	
		後	ヤブサメ	14	オオルリ	13	シジュウカラ	12	79	
	下旬	前	オオルリ	12	ヤブサメ	7	シジュウカラ	6	47	
		後	メボソムシクイ	17	キビタキ	14	ヤブサメ	11	91	
10月	上旬	前	メボソムシクイ	14	ヤブサメ	10	シジュウカラ	9	65	
		後	メボソムシクイ	23	オオルリ	12	ウグイス	10	94	
	中旬	前	メボソムシクイ	15	ウグイス	10	キビタキ	9	91	
		後	メボソムシクイ	17	ウグイス	12	キビタキ	10	75	
	下旬	前	シジュウカラ	17	メジロ	12	ウグイス	11	67	
		後	ウグイス	22	シジュウカラ	20	メボソムシクイ	11	94	
11月	上旬	前	メジロ	35	ルリビタキ	11	ウグイス・シジュウカラ	9	98	
		後	ルリビタキ	73	メジロ	25	ウグイス	24	138	
	中旬	前	ルリビタキ	30	メジロ	14	アオジ	13	110	
		後	ルリビタキ	24	シジュウカラ	12	ウグイス・メジロ・ホオジロ	3	56	
	下旬	前	ルリビタキ	8	カヤクグリ	4	シジュウカラ	4	31	

この表でもわかるように秋がしだいに深まるに従って夏鳥、旅鳥、冬鳥などが通過し、優占種が漸次移り変わっていることがうかがえる。

つぎに9年間の各旬の前・後の確認個体数の推移を第1図に示す。またそのグラフに重ねて、各旬の前・後の記録延べ種類数の推移を示す。

第1図 1964～1972年の9年間の各旬の前・後の鳥類確認個体数及び種延べ種類数



つぎに第1図の個体数及び種類数の内容すなわち留鳥・候鳥の混合状況を第4表・第5表に示す。

第4表 各旬前・後期の留鳥・候鳥種類別混合状況

種類	月旬前後	8月		9月						10月						11月			
		下旬	後	上旬		中旬		下旬		上旬		中旬		下旬		上旬		中旬	下旬
				前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
留鳥		7	9	7	8	8	10	7	6	10	7	9	8	9	8	6	6	5	4
夏鳥(含旅鳥)		9	12	10	10	9	7	10	8	11	9	5	5	6	4	4	0	1	0
冬鳥		0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	2	2	6	7	13	11	7	8
計(種)		16	21	17	18	18	17	17	14	21	19	16	15	21	19	23	17	13	12

第5表 各旬前・後期の留鳥・候鳥個体数別混合状況

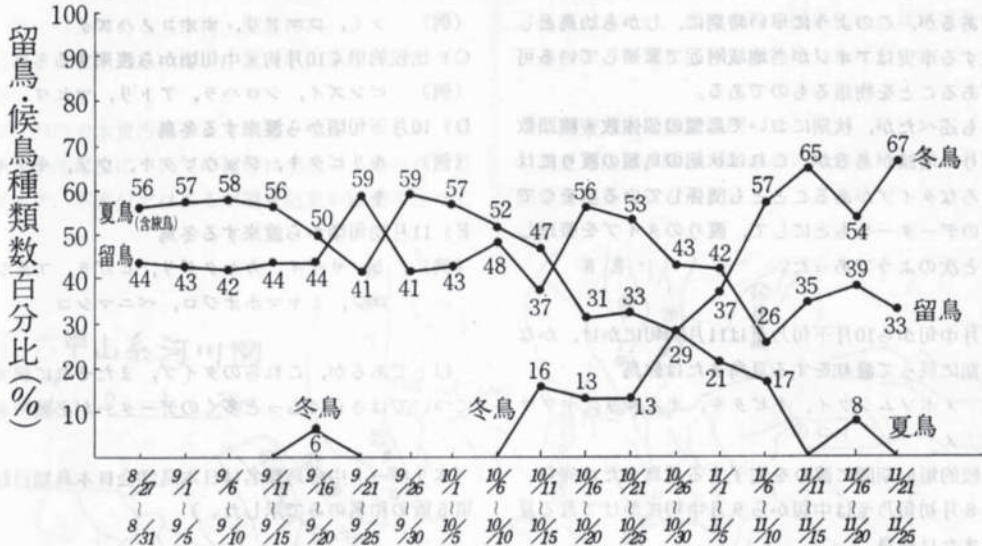
種類	月旬前後	8月		9月						10月						11月			
		下旬	後	上旬		中旬		下旬		上旬		中旬		下旬		上旬		中旬	下旬
				前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
留鳥		29	30	26	46	31	21	34	22	39	44	34	55	62	62	65	45	22	10
夏鳥(含旅鳥)		44	56	72	48	47	26	57	43	55	41	30	10	20	5	5	0	1	0
冬鳥		0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	11	4	12	31	68	65	33	21
計(羽)		73	86	98	94	79	47	91	65	94	91	75	69	94	98	138	110	56	31

第1図及び第4～5表を見ると、この3か月の期間に鳥類の個体数及び種類数にかなりの変遷があることがわかる。大まかに言うと、秋期に鳥類の個体数・種類数共に増す3時期があるようである。すなわち8月の終りか

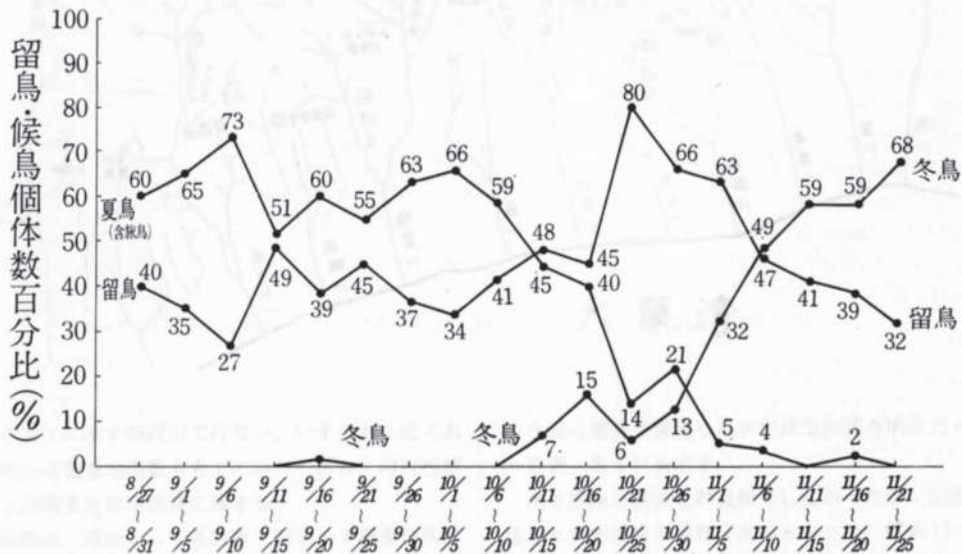
ら9月上旬、9月下旬から10月上旬、11月の上旬から中旬前期にかけてである。その時期には当然の原因として候鳥が質量ともに増加しており、これは鳥類の渡りにある程度の集団がある（同種及び色々な種の集団の集まり）からではないだろうか。これについてはまた後述

べることとして、第4表、第5表の実際数を%で表して見る。即ち、各旬前・後期おのおのの全数を100とし、その中に含まれる留鳥・候鳥を%で表わしたのが、第2図、3図である。

第2図 各旬前・後期における確認鳥類延べ種類数の内の留鳥・候鳥の百分比



第3図 各旬前・後期における確認鳥類延べ個体数の内の留鳥・候鳥の百分比



第2図・第3図でわかるように、種類数においても、個体数においても、その合計において当摩耶山においては秋期には大たい候鳥の方が留鳥を上回っている。10月の中旬から11月の初旬までの数旬には質・量ともに留鳥がやや多くなっているのは、夏鳥・旅鳥は非常に少なく

なり、冬鳥がまだ出揃っていないためであり、9月の中旬から下旬の初めにはかなり留鳥の比率が増加するのは夏鳥のあるものが渡ってしまい、旅鳥の最盛期にまだすこし早いといったことが原因しているであろう。

当摩耶山は渡りの通路として候鳥がかなり通過するだ

ろうということは想像していたものの、秋期において留鳥を質・量ともにはるかに上回っていることは非常に意外な結果であり、興味ある事実である。

またこの表での9月16日～9月20日の冬鳥はアオジであり、この表には出ていないが1968年8月7日に同種が羽毛がまだ生えそっていない幼鳥の状態であることを確認した。同鳥は当地域では11月初旬になって出現する冬鳥であるが、このように早い時期に、しかも幼鳥として存在する事実はアオジが当地域附近で繁殖している可能性があることを物語るものである。

前にも述べたが、秋期において鳥類の個体数・種頭数にかなりの増減があるが、これは秋期の鳥類の渡りにはいろいろなタイプがあることとも関係している。そこで9年間のデータをもとにして、渡りのタイプを整理して見ると次のようであった。

- A) 8月中旬から10月下旬乃至は11月初旬にかけ、かなり長期に亘って渡りをする夏鳥または旅鳥
(例) メボソムシクイ、キビタキ、オオルリ、ヤブサメ
- B) 比較的短い期間に渡りを完了する夏鳥または旅鳥
a) 8月初旬乃至は中旬から9月中旬にかけて渡る夏鳥または旅鳥

(例) サンショウクイ、コルリ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、サンコウチョウ、コサメビタキ

b) 9月中旬から10月中旬乃至は下旬にかけて渡る夏鳥または旅鳥

(例) サメビタキ、マミジロ、マミチャジナイ

c) 10月初旬から11月中旬にかけて渡る夏鳥または旅鳥

(例) ツミ、コマドリ、オオコノハズク

C) 比較的早く10月初・中旬頃から渡来する冬鳥

(例) ビンズイ、シロハラ、アトリ、マヒワ

D) 10月下旬頃から渡来する冬鳥

(例) ルリビタキ、ジョウビタキ、ウソ、キクイタダキ

E) 11月初旬頃から渡来する冬鳥

(例) ミソサザイ、カヤクグリ、ヒガラ、アオジ、クロジ、ミヤマホオジロ、ベニマシコ

以上であるが、これらのタイプ、またそれに属する種についてはさらにもっと多くのデータが必要である。

(本レポート中の鳥類名は日本鳥学会日本鳥類目録改訂第5版の和名のみで示した。)

表1 秋期の鳥類の渡りタイプとその割合

